

1、「世に打ち勝つ」。これはヨハネ文書独特の言葉です。でも「世に打ち勝つ」などとそんなに簡単にいってよいのでしょうか。「世」は闇が支配しているのです。そんなに打ち勝てるようなものではありません。8月1日にT新聞の第一面に、マイクを握る山本昭彦さん（水俣病不知火 [しらぬび] 患者関東支部）の苦渋にうちひしがれた顔写真が載せられていました（裏面参照）。政府はこの日をもって特措法救済を締切りました。確認から56年。まだ申し出られない患者がいるのです。「切り捨て」を考えると「世」の力の前に打ちのめされている表情です。この類いの「世」の力は、核、沖縄、貧困、虐待、自殺など、日常いやという程見せつけられています。

2、ヨハネはどういう意味で「世に勝つ」といっているのでしょうか。それには次の言葉がヒントになります。「この方は、水と血を通してこられた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とによってこられたのです」（5:6）。ここにはイエスの洗礼（水）だけではなく十字架の苦難と死（血）の強調があります。ヨハネの論敵グノーシス化された「偽教師」たちの救済観は「水」を強調します。地上のイエスには洗礼の時に天なるキリストが結び付き、受難の前にキリストは離れた、そのキリストへの認識が救いの根幹をなすという主張です。十字架の死に重きをおかないのです。その救済観は知識（覚知）の観念体系です。完結性を持っています。知識に陶醉している人は「独り」で「救われる」のです。結局「水」は自己完結を象徴しています。しかし「血」は神が他者と共にある在り方を示しています。十字架の死は、神が自らの自己完結を破って（フィリ2:6-8）、他者と共にあり続けるところに救済を示す出来事でした。「世」の全ての出来事の動機付けをヨハネはこの自己完結に見ます。イエスの十字架の受難と死は、他者と苦難を共にし、自己の死を通して、逆説的に共に生きる道（愛）を打ち立てた出来事でした。ここに「世」に打ち勝つ根拠を見ます。だから「イエスが神の子である」（5:5）ことへの「信」が大事なのです。「キリストへの覚知が救済である」との主張とは歴然と違うのです。「あなたがたはこの世では苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」（ヨハネ16:33）とあります。苦難には、勇気をもって対処してゆくのが、イエスに従う道です。

「世」との攻めき合いの極みでイエスの十字架の苦難と死を想起して、「世」に流さればなしでない生き方に逆転してゆくことが「世に打ち勝つ」ことです。

3、もう40年近く前、牧会の中で出会った一人の青年の生き方を思い起こします。彼の兄は国立大学の優秀な学生でした。しかし、突然自死してしまいました。教育者の両親の嘆きは大きいものでした。その頃は、日本の高度成長期で競争社会でした。皆エリートを目指して大学へゆきました。弟も優秀な高校生で、トップの大学への進学が期待されていました。しかし兄の死を受け止めた彼は大学進学を止めて、専門学校で理学療法士の道を選び、生涯、障がい者や弱者に仕える仕事に励んでいます。彼は兄の死を通して「世」の在り方に流されないで自分の人生を展開しました。兄の死を虚しくしませんでした。「世に勝つ」生き方ではないでしょうか。